AIではできない仕事

公益社団法人埼玉県診療放射線技師会
会長　田中　宏

とどまるところを知らないAIの技術は医療の世界をどう変えるのか。医療系の経済雑誌ではAIが確定診断する未来を予想している。

以前の巻頭言でも触れたが、東京大学医科学研究所が使うWatsonは急性骨髄性白血病に対する抗がん剤投与で、治療の成功へと導いたニュースは大きな話題になった。その他、さまざまな分野でAIの活用が期待されている。がん治療、精神疾患診療、鑑別診断の支援、画像診断支援、24時間の遠隔見守り、手術ナビゲーション支援、救急医療情報支援などである。われわれに関する分野では画像診断支援としてクラウドを利用し、いつでもどこでもAIによる画像診断支援が受けられるようになるであろう。

しかし、AIではなく人間でなければできない仕事がある。それは、決断と責任である。診断や医療における決断は責任が問われ、AIはその責任をとることはできない。つまり、AIの判断精度がいくら高くなろうと、仕事の決断と責任は人間でなければならないということである。さらには患者に寄り添うという医療についてもAIではなく、人が寄り添うからこそ安心感が生まれるのである。

責任には業務上の責任と法的責任があるが、まずは業務上の責任について考える。戦国時代の責任とは、腹を切り首を差し出す。ということになるが、今の世の中では許されるわけもない。責任とは大辞泉では「自分のした事の結果について責めを負うこと。特に、失敗や損失による責めを負うこと」と記されている。つまり矢面に立つことである。例えば、何かの不祥事が起きた場合に、記者会見などで頭を下げるシーンがあるが、そこに登場してくる人たちは、最高責任者か人事管理者という組織内では極めて地位の高い人たちである。私たちの日常的な業務でいえば、患者への説明責任や、病院長や部局長などの管理者への説明責任、技師長などの上司への説明責任をいう。

次に法的責任について考える。大辞泉では「法律上の不利益または制裁を負わされること」と記されている。昔は医療のほとんどは医師が責任を負っていたが、現在は各メディカルスタッフがそれぞれの責任を果たしており、医療訴訟になった場合はメディカルスタッフが責任を負うことは一般的である。

AIが医療現場に利用されるようになったとき、診療放射線技師にとってAIに使われるのか、それともAIを利用するのかは「決断と責任のある仕事」「患者へ寄り添い」という2つのキーワードだと考える。